

明恵における五聖と五秘密について（元山）

明恵における五聖と五秘密について

○ はじめに

元 山 憲 寿

明恵房高弁（一一七二―一二三三）、以下、明恵は、鎌倉期を代表する僧の一人である。明恵は華嚴を復興させた僧としての一面があるため、現在でも華嚴僧として位置づけられている。しかしながら、それと同時に明恵とその思想には密教を抜きにして語ることができないという側面もある。その理由としては、彼が神護寺において仏道修行を始めたということや、彼の著作の多くに真言教学の思想が入っているということが挙げられる。また真言の法流上にもその名が見られるという史実もある。このように明恵は華嚴僧であり、真言僧でもあるという特異な教学的立場に置かれている。これに関して、石井教道氏のように「嚴密」^① というような解釈を示す先行研究さえ存在する。

明恵による華嚴・真言の思想的融合は、彼の著作に見られるところである。その中心となるものに、『華嚴仏光三昧観秘宝蔵』^②（以下、『秘宝蔵』）が挙げられる。『秘宝蔵』では、華嚴の観法とされる「仏光三昧観」に密教の思想を取り入れ、華嚴の観法を密教の行法にしたと考えられる。この著作は、上下二巻から構成されており、上巻では華嚴の観法について、教学的立場からの解釈がなされている。下巻では具体的な実践方法などが記され、特に下巻において「仏光三昧観」と密教の思想の融合化を図ろうとしていることが伺える。

『秘宝蔵』において、華嚴と密教の融合を図ろうとした点はいくつか挙げられるが、その中でも、五秘密尊と五聖と呼ばれる仏・菩薩の同体化を図っている点は注目しなければならない。^③ この五聖と五秘密を同体とする思想こそ、明恵

の華嚴・真言の融合を現しているものと言えるからである。そのため本稿では、明恵における五聖と五秘密の関係を中心に、明恵の華嚴・密教の思想的、実践的融合を見ていくこととする。

一 華嚴の三聖と五聖について

まず仏光三昧観は、三聖とされる毘盧遮那・文殊・普賢の理智の功德を観じるものである。また、この三聖をもって仏光観の観門の主とするのである。柴崎照和氏によれば、仏光三昧は『華嚴経』の「光明覚品」に原形があるとされている。⁽⁴⁾

三聖については、五台山系の華嚴の流れを汲む唐の李通玄居士(六四五～七三〇)の著作である『華嚴経合論』⁽⁵⁾や華嚴第四祖の澄観(七三八～八三九)の著作である『大方廣佛華嚴経疏卷第三』⁽⁶⁾の中に見ることがができる。三聖は仏光観の観門の主であるとされているが、明恵はこの三聖を發展させ、五聖として仏光観の観門の主としたのである。

明恵が「仏光観」を修し始めた時は、三聖を観門の主として修しているが、それは「三聖円融観」という教理が背景にある。これに関して、明恵の著作である『入解脱門義』の中心が「三聖円融観」について著されたと言えるからである。また、『入解脱門義』の中に記される図印においても「文殊毘盧遮那普賢尊」という三聖が記されている。そのことから、『秘宝蔵』を著す以前は明恵自身、三聖を観門の主としていたことがわかる。それは、多くの先行研究などで指摘されているところである。

しかし詳細は後述するが、彼は『解脱門義』を撰述する以前の著作である、『仏光観略次第』の中ですでに「文殊・普賢・観音・弥勒」の名字を唱え、人観の観想の時にもこの四菩薩を記している。『秘宝蔵』において初めて説明される四菩薩が、『解脱門義』以前に記されている点は興味深いところである。

では明恵は、どのようにして「仏光観」の観門の主とされる三聖を五聖へと發展させたのであろうか。

明恵は、『秘宝蔵』を撰述する以前から「仏光観」を修しているのだが、その中で得た好相や夢想、そして李通玄の

明恵における五聖と五秘密について（元山）

著作によつて、三聖から五聖へと展開させたのである。それについて、修している時に得た好相や夢想を書き記した『華嚴仏光三昧観冥感伝』⁽⁷⁾の記述を見ると、

① 同八月七日ノ初夜ノ禪中ニ、身心凝然トシテ、如レシ存スルガ如クナリ亡ズルガ。虚空中ニ有リ三人ノ菩薩一是レ普賢文殊観音也。手ニ執ニル瑠璃杖一ヲ。予、以ニテ左右ノ手一ヲ堅ク執ニル杖ノ端一ヲ。菩薩ハ執ニリ杖ノ本一ヲ。予、執ニル杖ノ末一ヲ。三菩薩引ニキ挙グ杖一ヲ。予、懸レカリ杖ニ速カニ到リ兜率天ニ着ニク弥勒ノ楼閣ノ地ノ上ニ。其ノ間、身清涼ニシテ。心適悦ナリ。无ニシ物トシテ于取レルモノ譬一エルニ。忽チニシテ見ニル瑠璃杖ノ立ニツテ宝地ノ上ニ。⁽⁸⁾

（傍線筆者、以下同）

② 此観門殊主ニスルガ普賢文殊観音弥勒毘盧遮那ノ五聖ニ故⁽⁹⁾

とあるように、①については、行中に体得したものであるが、普賢・文殊・観音と共に、弥勒の楼閣へ昇るといふ内容の好相である。ここで、五聖の中の四菩薩が現れている点は注目しなければならない。それはこの時点では、観門の主を三聖として「仏光観」を修しているため、この好相は彼にとつて重要なものであったと考えられる。

また②については、①で得た好相や李通玄の著作の影響を受けて、観門の主を五聖としたと考えられる。これについて、『秘宝蔵』の上巻に『華嚴経合論』を典拠として、「仏光観」において観想する対象は行者に任せるとしながらも、以下のように記している。

其ノ中ニ殊ニ普賢・文殊、或ハ可レシ加ニウ観音・弥勒一ヲ広論三聖義中ニ、説ニク行者成仏ノ三聖一ヲ。云ニウ文殊・普賢・弥勒一ト。又タ説ニテ大悲行ノ三聖一ヲ、云ニウ文殊・普賢・観音一ト出ニシテ已成果ノ三聖一ヲ、云ニウガ文殊・普賢・毘盧等一ト故也⁽¹⁰⁾

として、毘盧遮那・文殊・普賢の三聖だけではなく、観音・弥勒という名を挙げている。李通玄の著作自体には、毘盧遮那・文殊・普賢・観音・弥勒という仏・菩薩が同時に記されていない。しかし明恵は、『華嚴経合論』を典拠として五人の仏・菩薩を挙げている。李通玄の著作と、自身が得た好相などを組み合わせ、五人の仏・菩薩を五聖として

「仏光観」の観門の主としたと考えられる。

三聖から五聖へと展開させた理由は、明恵は華嚴と真言の思想的、実践的融合を図ろうとしたと考えられる。詳細は後述するが、彼は五聖と五秘密を同体化するという思想を構築している。そのために三聖を発展させ、五聖にする必要があったと考えられる。

二 五聖と五秘密との同体について

明恵が華嚴の三聖を五聖へと発展させた意図は、五秘密と同体化させ、華嚴と密教の思想的、行法の融合をしようとしたからである。

それに関して、明恵は『秘宝蔵』の下巻において、毘盧遮那・文殊・普賢・観音・弥勒の五聖と五秘密尊とを、同体とする説を立てる。それらを『秘宝蔵』の流れに沿って見ていく。

明恵は五聖と五秘密の同体の根拠として、一、大悲・大智、二、体・用、という二つ特性に焦点を当て解釈するのである。まず初めに、

又タ准ニズレバ三聖為体、大智大悲ヲ相導スル義ニ、五秘密瑜伽ハ全テ是レ彼ノ三摩地也

として、大智大悲の義に従えば、五秘密瑜伽と仏光三昧観は同じであるとしている。その根拠として『五秘密儀軌』⁽¹⁾を引用して、大悲・大智、体・用について述べている。以下に引用箇所を記すと、

①

如ニシ彼ノ儀軌ニ説クガ。則チ於ニテ身前ニ想シイ金剛薩埵ノ智身ヲ、如ニク自身ノ、観ズベシ以ニテ四印ヲ圍中遶スト同一月輪、同一蓮華上ニ云々。又云ク、瑜伽トハ者常ニ以ニテ四眷属ヲ、而自ラ圍遶シ、處ニス大蓮華、同一月輪ニ云云。又云ク、五身ト同一大蓮華トハ者為ニス大悲ノ義ト。同一月輪円光トハ者為ニス大智ノ義ト。是ノ故ニ、菩薩ノ由ニルガ大智ニ故ニ不レ染ニセ生死ニ。由ニルガ大悲ニ故ニ、不レ住ニセ涅槃ニ云云。解シテ曰ク、此ノ中ノ蓮華ヲ為ニシ大悲ト。月

明恵における五聖と五秘密について（元山）

輪ヲ為ニスコト大智ト、如レク文ノ易レシ知リ。円光大智ノ義ハ、通ニズ悲智ノ二法ニ也。仏地一切ノ功德ハ皆、以ニテ大智ヲ爲レスガ体ト故ニ。是ノ故ニ、瑜伽宗諸尊ノ字印形像ハ皆、帶ニス円光ニス。即チ此ノ義也。問ウテ曰ク、然ラバ者儀軌ノ中ニ何シガ故ニ不レ云ニ円光ハ通ズト大悲ニ耶。答ウ、大悲ハ者以ニテ大智ヲ爲レス体。大悲ハ即チ大智ノ用也。是ノ故ニ常ニ雖レドモ以ニテ大悲ヲ爲レス用ト。其ノ智ノ体ハ無ニシ改易ニ。是ノ故ニ与ニ月輪一同説ナリ。約ニシテ総相ニ説ク也。思レイ之ヲ可レシ見ル。是レ則チ今ノ三昧觀門、以ニテ五聖ノ功德理智大悲ヲ令交徹シテ成ニスル立行者ノ身心ヲ義ニ大イニ同ナリとあり、五秘密尊の曼荼羅の同一大蓮華は、大悲の義を表しており、同一月輪大智の義を表している。大悲は大智をもつて体と為して、大悲は大智の用であるから、五聖の功德によつて、行者は理・智・大悲を成立することが出来るとしている。

また四菩薩(欲・触・愛・慢)にも大智・大悲、体・用を当てはめ、五聖の特性も配当しているが、これは明恵独自の解釈であり、『五秘密儀軌』等は引用されない。

②

又四菩薩ノ中ノ欲・触ハ是レ文殊ノ大智体用ナリ。此ノ中ニ撰ニス普賢妙慧ヲ。如レク次イデノ欲ハ是レ文殊ノ大智ナリ。謂ク、欲菩薩ハ持レス箭ヲ。箭ハ射ニ取ル遠クノ物ヲ徹ニス其ノ骨髓ニ。即チ文殊ノ大智ハ徹ニスル法性ニ義也。觸菩薩ハ住ニス抱印ニ。謂ク、行起解絶ナリ。即チ依ニリテ普賢ノ妙慧ニ解行ヲ和合スル義也。依レリテ此レニ文殊ヲ爲レス体ト。普賢ヲ爲レス用ト也。次ニ愛・慢ハ是レ大悲ノ体・用也。如レク次デノ愛ハ是レ觀音ノ大悲ナリ。謂ク、愛菩薩ハ持ニス摩竭幢ヲ。如レク摩伽羅魚王ハニレミ物無レ所レ遺ス、菩薩大悲ノ盡ニスナリ衆生界ヲ也。慢菩薩ハ住ニス慢印ニ。謂ク、大悲ノ拔レキ苦即チ是ノ体也。大慈ハ与レエ樂ヲ。衆生ハ得レテ樂ヲ生ニス傲慢ヲ。即チ無上菩提大涅槃ノ樂ナリ。於ニテ一切世間ニ無ク等比ニスルコト。如シ世間ノ人ハ歡樂ノ時、以ニテ左右ノ手ヲ押サガ自ラ腰上ヲ也。依レテ此レニ觀音ヲ爲レス体ト。弥勒ヲ爲レス用ト也。¹³

欲・触は文殊の大智・体・用であり、欲は文殊の大智であり、文殊を体とし、普賢を用としている。また、愛・慢は大

悲の体・用であり、愛は観音の大悲である。観音を体とし、弥勒を用としており、五秘密にも四聖の大智・大悲・体・用を配当して、同体の根拠している。

③

問ウテ曰ク、何シガ故ニ転ジ此ノ五尊ヲ成ニズル此ノ五聖ニヲ乎 答ウ。依リ本経ノ儀軌ノ意ニ、五部諸尊一切曼荼羅ハ不レ離レ此レ五身ヲ。同一月輪ノ円光、同一蓮華ハ、如レク次イデノ表ニスト大智・大悲ノ義ヲ云々。是ノ故ニ此ノ五聖ハ皆撰ニス在此ノ中ニ。即チ分ニチ大智大悲体用ヲ為ニシテ四聖ト、合ニシテ四聖ヲ成ニズルガ毘盧遮那ヲ故也。故ニ儀軌ニ云ク、金剛薩埵ノ三摩地等ハ如ニシ上ニ引クガ。其ノ義ニ可ニシ准ジテ知ル。准ジ此ノ大意ヲ可レシ得ニ其ノ義ヲ。況ヤ復タ儀軌ノ中ノ、以ニテ五密五尊ヲ各ノ別ニ配ニス三十七尊ヲ。即チ如ニシ文ニ云ウガ。金剛薩埵者是レ毘盧舍那ノ仏身。欲金剛ハ是レ金剛波羅蜜。計哩計羅ハ是レ宝波羅蜜。金剛愛ハ是レ法波羅蜜。金剛慢ハ是レ羯磨波羅蜜。如レク此ノ四仏四菩薩ハ皆如レシ是ノ。乃至、内外ノ四供、眷者即チ彼ノ四眷屬ト云云。(本文ニ列ニシ諸尊ヲ別別ニ配屬ス。今ノ略抄也)又云ク、普賢曼荼羅ハ不レト離ニレ五身ヲ云云。今、五聖モ亦タ普賢曼荼羅也。但シ顕密為レス異ト。或イハ秘記ニ云ク、
 從ニリ大日一出ニシ四仏ヲ、從ニリ四仏一出ニシ四波羅蜜ヲ。從レリ此レニ出ニスト普賢・文殊・觀音・弥勒ヲ云云。即チ此ノ証拠也¹⁴

『五秘密儀軌』と『秘記』¹⁵を引用し、五秘密と五聖を同体とする根拠を挙げている。すなわち、

一、五尊を転じて五聖とするのは、五秘密は五部諸尊一切曼荼羅とは別なものではない。

二、『五秘密儀軌』の「金剛薩埵ノ三摩地ハ名ニク為一切諸仏法ト。此ノ法ハ能ク成ニシ諸仏道ヲ、若シ離レルルハ此レ更ニ無レシ有レルコト仏」という文を引いて解釈している。一切諸仏の法は、金剛薩埵の三摩地から離れることがないため、五尊を転じて五聖としても問題がないとしている。¹⁶

三、大日より四仏が出て、四仏より四波羅蜜が出生するならば、普賢・文殊・観音・弥勒の四菩薩(四聖)も大日より出生するとして、四菩薩(四聖)は密教の中に包括されるとするのが証拠であるとしている。

明恵における五聖と五秘密について（元山）

そして『秘宝蔵』の終わりに、密教（五秘密）と顕教（五聖）との同体についての最終的解釈を記すのである。以下に記すと、

問ウテ曰ク、五密瑜伽等ハ是レ密教也。今ノ三昧観是レ顕宗也。何ゾ通ジ修レスル之ヲ耶 答ウ、顕密通修ノ義不レ可ニ殆

ド疑^一ウ。即チ如^ニキ法華法等^一ノ是レ也。（中略）両宗ノ證果ハ何ンガ強テ好^ニマン差異^一ヲ乎^⑬

として、五秘密瑜伽は密教、仏光三昧観は顕教であるが、真言（密教）は華嚴を包括しているので、違いはなく、同体としても問題がないとしている。

明恵の五聖と五秘密との同体説は『秘宝蔵』で、実践的、教理的にも体系化されたと言えよう。この同体説から、真言・華嚴との関わりを作り上げ、『秘宝蔵』の中で彼の理想としている真言・華嚴の融合が成されたと考えられる。

『秘宝蔵』以前の著作においても、華嚴・真言の融合は図られていたが、この著作で華嚴・真言の融合が完成したと言える。三聖から五聖へと展開させ、五聖と五秘密とを同体化したことが思想的融合であり、詳細は後述するが仏光観を華嚴の観法から密教の行へと発展させたことは実践的融合であると言える。

三 五聖と五秘密に関する次第と著作について

明恵の五聖と五秘密に関する次第やその他の著作類を見ることによつて、五聖と五秘密との同体説がどのように展開していったかを辿ることができよう。また、成立年代の不明なものもあるため、成立年代の分かるものは年代順に記し、不詳のものはその後並べて記していく。

『五秘密』^⑭ 建久六年

『仏光観略次第』^⑮ 承久二年七月二十五日

『華嚴修禪観照入解脱門義』 承久二年九月三十日

『華嚴信種義』 承久三年九月二十一日

『仏光三昧観秘宝蔵』承久三年十一月九日

『仏光観広次第』²⁰ 撰述年代不詳

『光明真言七種印口伝在之普光明』²¹ 撰述年代不詳

『五秘密与五聖同体事』²² 撰述年代不詳

『五秘密仏光合行念誦次第』²³ 撰述年代不詳

これらの次第やその他の著作類には五聖・五秘密が記されている。『五秘密』を著した時すでに、五聖を記しているのは興味深い点である。それは『秘宝蔵』の下巻において、五聖と五秘密との同体説が具体的に記されるからである。

また、『広次第』・『略次第』・『光明真言七種印口伝在之普光明』は次第であるため、教理的な面から五聖・五秘密を導入した理由などは記されない。しかし、「広・略次第」で特に注目すべき点は、この次第に記される五聖が、胎蔵曼荼羅の中台八葉院に描かれる仏・菩薩と同様の印・形像で記されている点である。五秘密は金剛界の尊格であり、五聖が胎蔵曼荼羅の仏・菩薩と想定するならば、華嚴・真言の融合と言う側面だけではなく、両部の関係ということも言えるのではないだろうか。それは明恵が神護寺から仏道修行を始めているという点からも、少なからず両部ということ意識していたと考えられるのではないだろうか。

しかし彼自身は『秘宝蔵』の中で五聖と五秘密などの同体説などについて、真言が華嚴を包括していると記しているため、明恵自身がどの程度両部思想を想定していたかは、定かではない。

いずれにしても、彼は『秘宝蔵』撰述以前から、五秘密と五聖とを合わせた著作の撰述、行法を行っていることから、華嚴と密教との融合を比較的早い段階からイメージしていたと考えられる。

四 仏光観への光明真言導入の意図

明恵は仏光観の相応真言として光明真言を用いた。これについて彼が根拠としたのは好相・夢想に依るところが大き

明恵における五聖と五秘密について（元山）

い。それについては、『夢記』と『冥感伝』の中に記されており、多少の差異はあるが同じことを表わしているの二つを以下に記すと、

『夢記』

同二九日、後夜坐禅ス。禅中ノ好相ニ仏光ノ時、右方如ニキ續松火ノ火聚アリ、前ニ如レク玉ノ微妙ノ光聚アリ。左方ニ一尺二尺ノ光明充滿セリ。有レリテ音云ク、此レハ光明真言也。心ニ思ハク、此ノ光明ノ体ヲ光明真言ト云也。符_レ合ス本文_一ト。可_レシ秘_レス之_ヲ。⁽²⁴⁾

『冥感伝』

予、承久二年夏ノ此、百余日修_ニス此ノ三昧_一ヲ。同七月二十九日ノ初夜禅中ニ得_ニタリ好相_一ヲ。所謂於_ニイテ我前_ニ有_ニリ白キ円光_一。其ノ形如_ニシ白玉_一ノ。径一尺許リ也。左方ニ有_ニリテ一尺二尺三尺許リノ白色ナル光明_一充滿ス。右方ニ有_ニリ如キ火聚_一ノ光明_上。有_レリテ音告_レテ曰ク、此レハ是_レ光明真言也。出_レ観ノ時思惟スルニ甚_ク有_ニリ深意_一。如_ニキ火聚_一ノ光明トハ者照_レ曜スル惡趣_一ヲ光明也。別本ノ儀軌ニ云ク、有_ニリテ火曜ノ光明_一滅_ニスルハ惡趣_一者即チ此ノ義也。⁽²⁵⁾

仏光観を修している時に、明恵の前に白い光が現れ音を出して「自身は光明真言である」と告げたというのである。この好相を得た以後明恵は、仏光観に相應する真言は光明真言であるとして、仏光観を修する時はこの真言を用いるようになったのである。

明恵は『秘宝蔵』撰述以後、光明真言の普及を図り光明真言に関する著作を多く著しているが、彼は『秘宝蔵』の中でこの真言は五仏（大日・阿闍・宝生・弥陀・不空成就）の真言であるとしている。

明恵は、光明真言を仏光観の相應真言としているが、前述したように、五聖と五秘密を同体として華嚴と真言を融合させている。また、光明真言は五仏の真言としていることから、五聖と五仏との同体にも繋がるのではないだろうか。それ故に、光明真言を仏光観に相應する真言として用いた可能性が指摘できる。また、「仏光」と「光明」という単純なイメージによる導入ということも考えられる。しかしながら、彼の著作などで五聖と五仏を直接繋げるような記述は

ない。そのため仏光観における真言として光明真言を用いた理由は、前に記した『夢記』・『冥感伝』に依る以外にないのである。

五 まとめ

明恵は華嚴と真言を思想的、実践的に融合しようとしていた。それを『華嚴仏光三昧観秘宝蔵』の中で具体的に記したのである。『秘宝蔵』の中に見られる華嚴と真言の融合について核となるものが、五聖と五秘密の同体化であろう。

明恵は、華嚴の三聖とされる毘盧遮那・文殊・普賢の仏・菩薩を独自に発展させ、観音・弥勒を付け加えた。そしてこれを華嚴の五聖とし、五秘密尊へ配当して五聖と五秘密を同体化したのである。同体化する根拠として、『五秘密儀軌』と『秘記』を用いて説明している。いくつかの問題点を挙げた後に、真言は華嚴を包括しているので、五聖と五秘密との同体は問題がないとするのである。

また五聖と五秘密を同体として見たときに、五秘密は金剛界の尊格であるが、五聖を胎蔵曼荼羅の中台八葉院にいる五尊に当てはめることができる。これについては、明恵自身は具体的に記していないために詳細はわからない。しかしながら、五聖と五秘密の関係は華嚴と真言の関係だけでなく、両部の関係も指摘できるのではないだろうか。それは、『仏光観広次第』や『略次第』で記されている五聖の印・形像が、中台八葉院の仏・菩薩と同じことから、少なからず彼自身も両部不二思想を意識していたとも考えられる。

明恵が光明真言を仏光観の相応真言としたことは、仏光観を修していた時に得た好相に依るところとされている。しかし、明恵の光明真言解釈が五仏の真言であるという点を考えると好相だけに依るものではないだろう。五秘密と五仏との関係性が曼荼羅上の出生などと関連させたのではないか。そのために、仏光観の相応真言として光明真言を用いたとも考えられる。しかし、相応真言とした根拠については、『夢記』と『冥感伝』に記されるのみであるので相応真言とした理由については、好相に依るものとされている。

明恵における五聖と五秘密について（元山）

いずれにしても明恵は、『秘宝蔵』において、思想的、実践的にも華嚴と真言とを融合させようとしていたと考えられる。その融合が為された著作が『秘宝蔵』であり、その中でも五聖と五秘密の同体説がその核になる部分である。明恵は華嚴と真言の融合を図り、『秘宝蔵』撰述したと考えられる。

註

- (1) 石井教道「嚴密の始祖高弁」『大正大学学報』三、一九二八
- (2) 『大正蔵』七二、八七頁下
- (3) ここで使用した「同体」という用語は、野呂靖氏の「明恵の顕密観―五秘密与五聖同体説を中心に―」『印度仏教学研究』五四卷第二号を参照させて頂いた。
- (4) 柴崎照和「明恵と仏光三昧観―実践観から見たその受容の理由及び背景―(一)」『南都仏教』六五、四五頁
- (5) 『正統蔵』五卷七卷
- (6) 『大正蔵』三五、五二六頁中
- (7) 『日蔵』七四、一〇七頁。『冥感伝』の成立時期については不詳であるが、序に「秘宝蔵一章也。依^レテ憚^ルニ他見^ラ後^ニ日^ヲ分^ケテ為^シ別^記ト」とある。始めは『秘宝蔵』の一章とするつもりであったが、他人の目に触れるのを嫌って別記にしたとしている。『冥感伝』に記された好相などが、『秘宝蔵』に影響している点から、『冥感伝』の成立は『秘宝蔵』以前であると考えられる。
- (8) 『日蔵』七四、一〇八頁上
- (9) 『日蔵』七四、一〇七頁下
- (10) 『大正蔵』七二、九三頁中
- (11) 『大正蔵』二十、一一三六頁下
- (12) 『大正蔵』七二、九六頁下

- (13) 『大正蔵』七二、九六頁下
- (14) 『大正蔵』七二、九八頁下
- (15) 『秘記』については、詳細は不詳であるが、明恵は『秘記』なるものを用いて同体の根拠の一つとしている。
- (16) 『大正蔵』二十、五三八頁上
- (17) 『大正蔵』七二、九九頁上
- (18) 『明恵上人資料』第三、「真聞集」本。『五秘密』は、建久六年に抄出されたものと、田中久夫氏の「明恵」、奥田勲氏の「明恵遍歴と夢」で指摘されている。また「真聞集」の記述では、建保六月に弟子の隆弁に伝授したと記されている。
- (19) 『明恵上人資料』三、六〇一頁
- (20) 『明恵上人資料』三、五七一頁
- (21) 『明恵上人資料』第三、「真聞集」五。撰述年代は不詳だが、次第内に記される「三聖念誦次第」の奥書や「普光明」の奥書に、承久二年十月に「三聖念誦次第」、承久二年十二月に「普光明」を隆弁に伝授したとする記述があることから、『信種義』は著す以前に『光明真言七種印口伝在之普光明』は撰述されていたと考えられる。
- (22) 『平成十一年度 高山寺典籍文書総合調査団 研究報告論集』五頁
- (23) 『高山寺聖教類』第四部第一二九函第八二号
- (24) 『明恵上人資料』二、「夢記」一四九頁
- (25) 『日蔵』七四、一〇七頁

〈キーワード〉明恵、五聖、五秘密、『仏光三昧観秘宝蔵』